あひだでは、それは努力を阻碍する、そして其所では、潜在せる才能を發展させるための機會が缺げてゐる。また反對の極端においては、生れながら金持である人々の多くは貴い力を浪費する。が大部分の人々は、自分自身が賴りであり且つ生産的に働く程度に比例して富裕になれるので、自動的に最善を盡すやうになる。ところが、如何なる社會主義的制度も、この大きな且つ表面不可缺な原動力を有効に齎すことはできぬのである。

第三節　指導者と其れを獲る方法。卓越の愛着、其れは月桂冠によつて充され得るか？高等な卓越の愛着と下等な其れとの混合。愛他主義の有り得べき發達。

指導者に關しても同じやうな問題が生じる。すべての進歩は、精神的のも物質的のも、適當な指導者の選擇に、および、彼等の才能をできるだけ發揮させるための刺戟に、依存してゐる。社會主義の下では、有力な指導者を得る見込はどうであるか？

その見込は、若干の批評家達が認めてゐるよりも大きいやうに思はれる。肝要なことは――社會主義者達は謂ふ――競爭心を刺戟し且つ卓越愛着心を滿足せしめるための新しい且つより良き方法を見出すことである。人々の努力の主たる對象は、殊に指導者達の努力の對象は、名聲、地位、および權力である。尙また或る程度までは、彼等は、その天分を發揮せんがための單なる本能によつて鼓舞される。啻に詩人や畫家や音樂家のみならず、科學者や管理者も亦た、物事を成し遂げんとする本能によつて刺戟される。若し之に加ふるに、競爭心の、廣く普及せる評價の、顯著な卓越の、刺戟を以てすれば、現在社會の物質的報酬は與へないでも濟ませられる。天禀および能力を發揮するための自由な餘地を與へよ――然らば綬章や月桂冠が報酬として充分であらう。

以上の議論の根底を爲せる心理學は、確かに、すべての人々が富に對する單純な願望を有するものとするところの、昔の心理學よりも秀れてゐる。美術家や科學者は、富および世間的成功よりも他の色々なものに心を惹かれる。實業の指導者も亦た、他のそしてより高い理想に感應する。官途は今日でも、私的實業のより高い金錢的報酬を相殺して餘りある魅力を有する。産業の指導者や致富者は、極めて雜多な動機によつて動かされる。彼等は、張合ひといふ傳統

的な途を辿つてゐるが、彼等の追求する富は結局は成功の一表象に過ぎぬといふことは、漠然としか意識してゐないのである。彼等をば他の何よりもより多く刺戟するものは社會的野心である。だからして――社會主義者達は謂ふ――肝心なのは、何か或る卓越の表象、即ち、それを有つことが今日富を有することゝ同樣に著しく凡人の群を拔んでることになるところの表象である。

競爭心および模倣が、他の人々のと同樣に、產業的指導者達の所爲の根柢を爲すといふことは認めねばならない、しかし、今日の私有財產および不平等の制度において卑近な特殊の種類の評價および承認は無くても濟むといふことにはならない。粗野な人物には粗野な刺戟が必要である。實業的才能を有する典型的人物は、どの程度まで他の刺戟物に感應するであらうか？智的および精神的傾向のある人々の間においてさへも、色々の動機が混合してゐる。肉體の安樂、地位および權力の誘り、他人の勤勞の支配、は詩人や哲學者によつてさへも全然嫌はれてはゐない。全く利己的な者は殆ど無く、また全く利他的な者も殆ど無いやうに、高等な或は下等な形の卓越慾によつて全く動かされる者も殆どない。月桂冠のみで野心を滿すに足りることは多くはないのである。

愛他主義の發達に依存するところが多大である、そして之は更に、社會に遍在するところの精神に依存する。個人のより高尙な且つより廣い感情は、彼れをとり圍む雰圍氣によつて、或は幇助され、或は抑壓されるであらう。民主々義がよりよく發達するにつれて、即ち、敎育が普及し、品性が向上し、社會的および經濟的問題がより明かに理解されるにつれて、環境が奉仕における競爭心をよりよく助けるやうになるだらう、と思はれる。すべての人々が公益感により强く支配されるやうになればなるほど、報酬および優遇を與へるためのより單純な方法が有効になるであらう。しかし、かうしたことは徐々にしか發展しない。たゞ制度が變つたからとて、直ちに、根深い自愛的衝動が顚覆するだらうとか、或は、その現れ方が變はるだらうとか、考へることはできぬのである。

第四節　社會主義的國家における指導者の選擇。天才と獨創力とは去勢されそうである。

もう一つの問題は選擇の問題である。假りに、指導者たるに適した人々を刺戟し且つ報酬す

る方法は社會主義的國家においても發見され得るものとして、どんな方法でかゝる人々を選擇するか？

能力、才能、および天稟、の等級は、早くから認められるものでも容易に測定されるものでもない。前途の見込がある人々も或る試錬階段を通過せねばならない。高い智的能力は、肉體的熟練とは違つて、青年期を大分過ぎてからでなければ充分には現れない。詩人、音樂家、畫家、學者は、その若年時代の仕事をば好奇心と樂しみとを混合した氣持で追懷する。往々にしては、晩年に偉大な業蹟を擧げる人々も、若年時代にはその競爭者達と別段の變りのないことがある。殊に事務家は、經驗といふ苦しい學校で養成されるのである。なるほど、前途の見込ある人々は勞働者階級から容易に擇り拔かれる。がどの程度まで彼等が前途の見込を有するか、また、何所まで彼等が窮極のところ進歩するだらうか、といふことは、初期には明かではないのである。

如何なる社會も、多數の志願者の張り合ひ及び競爭を竢たずして、偉大な詩人、彫刻家、音樂家、を出したことはない。多くの人々が試み、僅かな人々が成功する。その譯合は、科學者、發明家、實業指導者、についても同じである。往々にしては、如何なる方面の事業においても、最も苦しい目に遇ふのは最も秀れた人々である、蓋し、彼等は世間よりも進んでゐるからである。高い能力は有つてゐるが天才の獨創力は有つてゐない人々――その所まで一般的嗜好が既に教育されてゐるところの詩畫をものする詩人や畫家、既に確立されてゐる原理を適用する科學や產業の指導者――は、最も容易に地位と稱讃とを獲る。他方において、社會には常に、新しい途を開拓せんと企てはするが其れを爲し得ない人々が澤山にゐる。世間には、自稱天才や狂氣じみた計畫者が一抔にゐるのである。今日の放資行程において卒先せねばならぬ人々、例へば銀行家達にして、新しい目論見――幾つかは明かに馬鹿げた、幾つかは疑はしい、幾つかは見込のある、目論見――を勸められずに終る日は殆ど一日もない。ところが、新奇な企業をば成功の見込を以て着手し得るためには、その前に秀れた判斷力の行使が必要である、そしてその次には、結果を試めすための實驗期を經なければならない。之と同じ話は、行政官吏、管理者、大企業の指導者、の選擇に關しても當嵌まる。誰れが有力な指導者たるべき特殊の能力を有するかといふことは、――殊に、誰れが新しい途を開拓する大指導者たるべき能力を有するかといふことは、前以ては分からないのである。

現在社會の『自然』淘汰に類似したものが何もない場合には、何びとによつて選擇が行はるべ

きであるか？　退けられて容れられなかつた人々は、その場合には最早や、他に彼等の目論見の後援者を自由に求めることはできぬであらう。彼等は、當路の役人の決定のまゝに諦めなければならない。政府は今や、實驗によつて證明濟みの方法で事務を處理し、そして、その事業のために私營産業において試驗濟みの指導者たる能力を有する人々を選ぶことが、甚だ困難である。もし選擇および勸業の責任が全然役人の肩にかけられたならば、どういふことになるであらうか？　現に有も有効に管理されてゐる公的企業でさへも、平々凡々のための、或はたかゝ、確立された方法への安全な執着のための、避難所となりがちである。新しい趣向や大きな目論見を有する人々は發言の機會がない。かくて、現存社會において政府が有利に管理し得るのは既に成熟の域に達してゐる産業のみだ、[1]といふ結論に導く理由と同じ理由によつて、政府によつての凡ゆる産業の支配は不可だといふ議論が寧ろ、より力強く成り立つのである。民主々義は或は、誠實にして有力な指導者を選擇するかも知れない、が之さへも實驗の立證を竢つのである。どんな政府組織も――民主的のものも專制的のものも、それが創造力ある人々を選拔し得るだらうと考へることは殆ど不可能である。巨大な集産主義組織は、殆ど確かに、あらゆる種類の天才に對して去勢的であらう。それの指導者の選擇は、たかゝ、既によく爲されてゐることをよく爲す能力を認める、といふだけのことではなからうか？

1) 第六十四章第二節

第五節　資本の改善を通しての物質的進歩は多分阻止されるだらう。今や分配上の變化のみが必要であるか、生産上の進歩は無視され得るか？

同じ種類の事情は資本の發展に對しても當嵌まる。資本の單なる蓄積――卽ち、剩餘の積立および『貯蓄』は、社會主義的國家においても、前章で注意したやうに、全く行はれ得ることである。しかしながら、これは、眞の資本が增加される過程の第一階段に過ぎない。道具、器械、『資本財』、は貯へられるのではない、それ等は作られるのである。ところが、その量の增加および質の改良は、技術の進歩があつて初めて可能である。社會の資本の有効な增加は、改良および發明によつてのみ生じ得る。

夢想鄕の描寫においては、普通には、理想社會において見られるであらうところの大きな機

械的改良――巨大な組織的設備、自動的な工夫物、巧妙な機械によつての緩漫な筋肉勞働の壓迫――に言及されてゐる。夢想鄕の計畫者達は、恰も此等のものが自ら生じるかのやうに謂つてゐる。が事實上では、大きな機械的進歩は、過去においては、色々な實驗と失敗とを伴つて徐々に現れたのであつて、剩餘資力の蓄積に依存はしたが其れによつて原因されたわけではない。なるほど、將來においては恐らく諸々の道具が今日の其等よりも遙かに完全なものとなるであらうけれども、すべて斯かる工夫物は、過去におけると同樣に、試驗によつて、選擇によつて、發達によつて、生じるであらう。そこには、啻に新しい資本を作るための資力がなければならぬのみならず、組織者および發明者がゐなければならない。現存する道具および機械の數を只だ增加するだけのことは容易である。一度びタアビン式機關と自動的動力織機とが完成されたならば、殆ど誰れでも其れと同じ種類のものをより多く作ることができる。がその織機またはそのタアビンを更に改良するには、甚だしく違つた手續および甚だしく違つた種類の人物を要するのである。

かくして資本の改良は、有能な指導者の選擇と密接な關係がある。兩者共に、進歩を持續するために是非とも必要である。だから兩者に對し、現存社會は富といふ餌を與へてゐる。なるほど、もし社會が理想的に完成され且つ理想的な指導者が自然に選擇されるわけであるならば、どんなことでも可能である。しかし非競爭的組織の下では、智力および品性において遙かに進歩した社會においてさへも、物質的進歩が維持される見込は極く少いやうに思はれる。

勿論、生產上の進歩は最早や最も重要な問題ではない、と謂へるかも知れない。よりよき分配が第一要件だと考へられるかも知れない。もし文明社會における總所得が今日において平等に分配されたならば、總ての者が充分に得られないであらうか？　恐らくは得られないであらう。問題は只だ、どれだけで充分か、といふことである。もし其れを一年に一千弗だとするならば（註一）、それは恐らく、世界中で最も富裕な國であるところの、合衆國における一家族の平均所得を豐かに見積つたものであらう。が若し此の年一千弗が、食物、住居、衣服、敎育、娛樂、において何れだけのものを意味するかを考へたならば、吾々は、それをば物質的進歩の最終階段たらしめて置いて滿足してゐることは、殆どできぬのである。確かに、それは、來るべき數世紀間に期待し得るものゝ手始めに過ぎない。だからして、社會主義的國家において大きな完成の――完成された自動的機械と非常に豐富な生產物との――實現を夢想する人々は、現在よりも遙かに大きな生產力が望ましい旨を白狀してゐる。尙また、より『科學的』な社會主義

者達も、大規模生産の不可避的勝利を、卽ち、小生産者および中産階級の滅亡を、語るに當つては、大規模生産の普及が依存するところの技術上の進歩が矢張り必要だといふことを暗示してゐる。が斯かる進歩は、繰返して謂へば、決して自動的に生じるものではない。

（註一）これは、一九一四——一八年の戰爭以前の物價および貨幣所得を標準としたものである。この種の例證的數字の利用に際しては、貨幣的條件におけるその後の變動を斟酌せねばならぬといふことは、殆ど注意を與へるに及ばぬことである。

第六節　問題は本質的には動機及び品性の問題である。人間性並びに張合ひ及び卓越の理想は變化する。社會主義と現時の諸改造運動との原動力は同じであるがその程度上の相違は莫大である。

私有財産制度と社會主義とのあひだの諸問題は、かくして、人々の品性、動機、理想、に關する諸問題に還元される。それ等は、その限りにおいては、心理學の——より卑近な言葉で謂へば、人間性の——問題である。それ等は單純ではなくて、甚だしく複雜である、蓋し、人間性は甚だ複雜なものであるから。

時として『嚴正に經濟的』な推論と呼ばれてゐるものは、個人に最大の利得を齎らす手續の熟慮的聰明な選擇の假定に立脚してゐる。それは、最も單純な形での快樂主義を假定する。自愛的動機以外の動機は、『經濟的』領域以外に屬する諸問題において——家族關係において、宗教において、慈善において、恐らくは政治的活動において——のみ現れるものだと考へられてゐる。が人間性は、かくの如く單純なものではなく、また、かくの如く綺麗に別々の部分に分割されるものでもない。人々は、全く利己的ではなく、また全く非利己的でもない。なるほど、他人を相手にする場合には大抵、自分自身の利益を追求する。そして此の事實こそ、『嚴正に經濟的』な諸學說に確實さを與ふるものである。しかし彼等は、冷酷に自分の利益を追求するわけではない。また將來においては、彼等は、その利益を追求するに、今日よりも寧ろより少く冷酷になるかも知れない。彼等は啻に法律によつてのみならず、より高い道德感によつても拘束されるかも知れない。人間性は、この點から見れば、時代を異にするにつれて相違し、また往々にしては、同じ人物でもその年齡を異にするにつれて相違することがある。それは、將

來においては大いに改善されて、今日のところでは全く夢想的だと思はれるところの、社會改造計畫の實行を可能ならしめるやうになるかも知れない。

張り合ひ及び卓越の衝動についてもそうである。過去においては、それ等は普通には、吾々が野蠻な祖先から相續したところの闘爭および征服の本能と一致して、或る形態の支配と變つた。他人に對する權力は、政治的および經濟的歴史の主調であつた。それは、封建制度の土臺であつた。それは現代社會――その張り合ひの方法は今尙ほ甚だしく封建的傳習に影響されてゐる――における富に對する闘爭をば、なるほど半ばは無意識的にではあるが、莫大に影響してゐる。卓越の愛着は極めて普遍的であり且つ極めて根深いものであるから、それを根絶することは不可能である。しかし其れをば、根絶し難い衝動は依然として滿足させつゝも幸福の諸要素をより廣く普及せしめるであらうところの、方向に轉ぜしめることは恐らくできるであらう。奉仕の精神が支配の精神に取つて代はるかも知れない、そして競爭心が、私益ではなくて公益を最も多く增進するやうになるかも知れない。

吾々は、吾々の野蠻な祖先よりも遙かに秀れてゐる――卽ち、大體において、より聰明であると同樣により愛他的である。この一般的改善については、過去百年間に多數の例がある。苦惱は、昔におけるが如くには我慢されぬであらう、それが摘發されさへすれば、何かその救濟策が講じられるであらう。殘忍な刑罰の廢止は深い意味のある現象である。社會的立法の絶えざる發達、および、慈善的および敎育的寄附金の增加も、矢張り、公益心の、發達しつゝある愛他的衝動の、結果である。

この見地からすれば、現時の大きな社會運動は總て同一の基礎に立脚するといふこと、および、それ等は總て個人主義から離れて社會主義の方向に傾いてゐるといふこと、が謂へる。なるほど先きに注意したやうに、[1] 完全な社會主義と特殊の產業の公的管理とのあひだには重大な相違點があるが、それにも拘らず、公の管理および監督への運動はより愛他的な精神の普及を基礎とする、といふことは主張され得る。そして、私的管理に對する公的管理の置換は、啻に此のより高い社會的精神によつて强制されるのみならず、それの結局の成功については、品性および智力のより高い平準に依存するのである。尙また、勞働立法についても、それは一般社會におけるより高い理想の普及によつて强制されると共に、それの窮極の成功については勞働者達自身のあひだの品性の改善に依存する、といふことが主張されるはずである。かくして、社會主義と他の諸々の社會改造運動とのあひだの、精神における、方法における、限定條件に

1) 第六十六章第五節參照。

おける、相違は、たゞ程度上の相違に過ぎぬと謂へるのである。

しかし、その程度上の相違は矢張り莫大である、そして、社會主義者達が期待するやうな、人間性における及び制度における根本的改造は、近い將來においては到底望まれない。人々の動機および理想が、從つてまた彼等の公の及び私の關係が、結局どの程度まで變化するだらうか、といふことを豫言するのは無謀である。しかし、それ等が極めて徐々に變化するだらうといふことは確かである。まだ長いあひだ、人々は矢張り殆ど現在の儘であつて、或る程度までは、より高い且つより大きな衝動に感應するが、しかし相互の大抵の交渉においては主としてより低い且つより狹い衝動に支配されて行動するであらう。彼等を元氣づけ、その能力を充分に發揮させ、自制させるためには、彼等自身の必要および利益によつて、および、家族的愛情といふ利己的な愛他主義によつて、刺戟することが必要であらう。その然る限りは、自分自身の努力への依賴の、個々人間の契約の、私的蓄積および私的所有の、制度が存續するであらう。

社會主義の見込および理想に關する見解の相違は、往々にしては、論爭者達のあひだの性格および氣分の相違のためである、とも疑はれる。甚だしく愛他的な人々は、容易に、他の人々も自分達を動かせる動機に感應するだらうと考へる。尙また、有益な勞働——たとへ、其れが持續的な且つ單調な勞働であつても——に從事する場合に最も幸福な人々は、他の人々も彼等と同樣に、報酬の率は殆ど顧慮しないで快く働くだらうと考へる。生活の理想および幸福の窮極の源について見ても、そうである。或る社會主義反對者達にとつては、社會主義のプログラムは、それが鬪爭のない——危險のない競技と同樣に平凡な——世界を提供するが故に非誘引的である。彼等にとつては、平和な張り合ひ、および、單に公益に貢献するだけの競爭は、あまりに平凡である。彼等は、勝利の見込が、從つてまた敗北の可能性がなくては、生活に興味を感じない。また、社會主義的國家では不可避——少くとも或る程度において——だと思はれるところの、生活の固定化についても、そうである。個人主義の辯護者達は謂ふ——人々をして、若し彼等が欲するならば、彼等自身を滅亡せしめ、また、彼等にとつて最も近しく且つ最も親しい人々に滅亡を齎らさしめよ、彼等は、どこまでも自分の生涯を形づくるための選擇の自由を得ずして、幸福および完成の、個性の充分な發達の、高所を極め得るであらうか？　之に反して、穩かな氣質の人々は、平和、安固、相互扶助、衣食住の保證——卽ち、燦爛たる獲物も哀れな失敗もない世界——に惹つけられる。自由は、人を異にするにつれて異つたものを意味する。或る人々に對しては、それは、競爭するための、そして勝利を收め且つ勝利の果實

を獲るがための、機會以外には何物をも意味しない。他の人々に對しては、それは、苦痛からの、優れた競爭者に對抗する必要からの、敗北の屈從からの、逃避を意味する。かゝる氣質の相違は、如何なる議論を以てしても調和させることはできない。だからして、私有財產制度と社會主義との長所および引力に關する論爭は、何時までも續くだらうと考へられるのである。

第七節　社會主義は社會的發達の窮極の結果たるべきか？　唯物史觀とそれの豫言。變動は漸進的だらうといふ確實性と其れが結局どの程度まで進むかを豫想することの不可能性。

前諸頁においては、遠い將來のことは考察しなかつた。吾々が幾つかの豫言を敢てし得るのは、たゞ來るべき數代についてに過ぎない。公有制度は、なるほど何の程度までかは確かでないが、とにかく普及するであらう。競爭の平準は高められるであらう、財產および相續の制度は制限されるであらう。直前の將來においては、幾つかの改造は明かに必要であり、他の改造は研究と試驗とを待つてゐる。しかし、最後の結果はどうなるだらうか？　社會の發達は、結局は社會主義的國家にまで進むであらうか？

マルクスによつて組立てられ、且つ多かれ少かれ社會主義的傾向を有する人々によつて採用されてゐるところの、謂ゆる唯物史觀（materialistic interpretation of history）は、一つの明白な解答を與へようとしてゐる。將來においては、不可避的に、生產手段の私有制度が廢止され、そして、財產を所有し且つ所得を享有する階級が驅除されるであらう。それの重要ならざる部分を取り去れば、その豫言は誠に簡單である。大規模生產が益〻普及するであらう、中小の生產者は滅びるであらう、殘るのは只だ、少數の大資本家と無產階級とだけであらう、大衆は益〻聰明に且つ自分達の力を意識するやうになるであらう、そこで資本家達は所有權を（必ずしも流血的革命によつてではないが）奪はれるであらう、そして充分に組織された社會主義的國家が現れるであらう。

一つのことは可なり確かである――顚覆は切迫してはゐない。一八四八年の革命の際に、マルクスは、この產業的發達の最後の階段が始まつたと考へた。長く續いたところの最初の階段

は、奴隷制度および農奴制度を通しての、勞働者の直接の搾取の階段であつた。第十八世紀の産業革命から第十九世紀の中頃まで續いた第二の階段を通じては、有産階級が自由勞働者を搾取した。第三のそして最後の階段は、資本家の剝奪を通しての勞働者の解放の階段であつて、之が、一八四八年の革命によつて導き入れられたものと考へられた。しかし此の豫言は、當時他の人々によつて懷かれてゐたところの、普遍的な民主的政府の時代が始まりつゝあるといふ自信ある期待と同樣に、殆ど實現されなかつた。一八四八年の騷ぎは、政治的或は社會的構造上の直前の變動は殆ど來たすに鎭つた。それの永續的結果は、他の諸運動の結果と融合して、徐ゝたる漸進的な變動によつて現れた。社會は過去五十年間に甚だしく變化したが、しかし其れは革命化されたのではないのである。

社會主義者達自身も、漸進的變動の免るべからざることを認めるやうなりつゝある。獨逸では、社會主義者仲間において、革命は切迫して居り資本家を早く剝奪すべきだといふ嚴正なマルクス流の學說を固守する人々と、變動が緩漫であらうことを主張して日和見政策に贊成する人々とのあひだに、奇妙な論爭が行はれてゐる。マルクスの「資本論（カピタル）」は獨逸の社會主義陣營における一種のバイブルであつた。この書物は、異常な智的能力の證跡と共に、明かに間違つた議論を含んでゐるが、忠實な社會主義者達は、その敎ふるところの何物をも放棄することを肯じない。しかし、マルクスと同樣に確信せる社會主義者達によつて、經濟的發達に關する彼れの豫言は間違つてゐるといふ證據が齎されてゐる。中產階級は滅亡しつゝはない。富豪の數は增加してゐるが、相當に富裕な人々の數も亦た增加してゐる。大工場の數は增加してゐるが、しかし大規模生產が全產業界を支配してはゐない、また、そうするだらうといふ模樣もまだない（註二）。民主々義は普及し、勞働組合運動は發達してゐる。しかし、差迫つた階級戰の、或は、團結せる勞働者達によつての社會主義的原則の斷乎たる且つ意識的な採用の、徵候は殆どないのである。

（註二）第五篇第五十五章第一——三節および第一篇第四章第一節に擧げた數字參照。尙また、Bernstein, Evolutionary Socialism, English translation, p. 57. 參照。ベルンシュタインは、非正統派獨逸社會主義者達のうちで最も有名な一人であつて、有能な而も高潔な著述家である。

なるほど、將來における變動は、過去におけるよりも恐らくより急速に進むであらう。敎育の普及、通信の容易、低廉な印刷によつての宣傳に對する莫大な便宜、は輿論をしてより變り易からしめる。安定せる習慣の惰勢はより少ない。しかのみならず、過去五十年間には、機械

的技術におけると同樣に產業組織において驚くべき變動があつた。今後の五十年間にも同樣に大きな變動があるかも知れない。產業の統一が恐らく强くなるであらう、そして公有制度が殆ど確かに普及するであらう。第二十世の終までには、恐らく、現時の着實なアメリカの實業家達には思ひもよらぬやうな發展があるであらう。

とはいふものゝ、根本的社會制度は急速には變革されぬであらう。强硬な社會主義者が實現したいと思ふやうな激變に比ぶれば、今のところで見込のある最も根本的な變動も、社會の表面をば殆どそのまゝで殘すであらう。濠洲の諸植民地は、現に、鐵道その他の大企業を公有とし、强制的仲裁および最低勞賃の制度を實施し、累進課稅等の方法を採用してゐる。しかし其所にも、競爭と金儲け、社會的諸階級と金錢的野心、財產および所得における著しい不平等、怠惰な金持と過勞せる貧民、がある。そこを旅行する者は、事物の狀態が、合衆國——そこでは、個人主義的な傳習が遙かにより粘り强くその足場を保持してゐる——における其れと實質上違つてゐないのを見出す。社會は、社會主義的目標に近づくことなしに、現在の制度を改めながら、長い道を行くことができるのである。

社會的發達の過程が緩漫なのは、人間そのものゝ變化が徐々だからである。啻に人間性および諸動機のみならず、社會の基礎を爲すところの、正邪に關する現時の標準——卽ち、正當な政治、正當な財の所有權・人々の間の及び男女の間の正當な關係、とは何であるかといふことに關する信念——は、非常に安定してゐる。佛蘭西革命のやうな大事變によつて震動させられた場合でさへも、それは、短期間においては殆ど攪亂されなかつた。それは、先例及び模倣の見えざる然し普遍的な勢力によつて、代から代へ維持されてゐる。敎育が徐々にしか大きな効果を擧げ得ないのを見れば、大衆の間の思想および行動の習慣を改變することが如何に困難であるかゞわかる。敎育の改善が最も有力な社會的溶媒だと考へられてゐるのは無理からぬことである。しかし、影響を與へんとする數百萬の人々に眞の影響を及ぼすことは困難である。敎育上の先覺者達の語るところによれば、目標とすべきことは、明晰な思索、精確な觀察、諸々の才能の自主的利用における訓練——殊に、良心と品性とである。しかし、最大の敎育的進步でさへも、かゝる摑まへ所のない目的を達するためには殆ど足しにはならない。ところが、敎育方法上の改良は如何に緩漫であり、個人の品性および日常生活に對する影響は如何により緩漫であることか！

とはいふものゝ、社會の發展に對する目標は無いかどうか、といふ問題は矢張り存在する。

完全な社會主義的狀態は近い將來においては生じる筈がないと信じられようとも、それは最後まで生じないであらうか？　余は、余自身としては、遠い將來に何が生じるだらうかを豫想し得るものとは考へることが能きない。四百年許り前の、文藝復興の旺盛時および宗教改革の初期における、文明社會の狀態がどうだつたかを考へて見よ。その當時に誰れが、その後の數世紀間にどんな發展が生じるかを、どんな政治的の、社會的の、智的の、産業的の、變動が起るかを、想像することができたであらうか？　今後の數世紀間にどんな變動が生じるであらうかを想像することも、吾々にとつて同じやうに不可能である。私有財産制度は、もし其れが存續するならば、恐らく今日の其れとは甚だしく違つたものとなるであらう。しかし、それが骨子においては變化なしに殘るであらうか、或は、現に缺ぐべからざるものと思はれてゐる多數の特徴を段々と奪はれるであらうか、或は、遂には何か社會主義的狀態のやうなものに變形されるであらうか――かうしたことは何も豫言することはできぬのである。

遠く將來を豫想することはできぬといふことは、社會主義者達自身のあひだでも、より少く熱狂的な人々によつては認められてゐる。所得の極端な大小を廢絶すること、相應な衣食住を廣く保證すること、有閑階級を絶滅すること、極めて大規模な諸産業を國家が引受けること、あらゆる自然的資源を支配すること――これ等は、まことに、社會主義者達のプログラムの主要點だと思はれる。が丁度、どの程度まで所得の等差を殘存させてよいか、どの程度まで私有財産制度を存續させてよいか、或る種の競爭的産業に對してはどれだけの活動の自由を與へてよいか――かうした問題に對しては、彼等のプログラムは確定してはゐない。各社會主義者は彼れ自身の夢想鄕を構成する權利がある。窮極の目標については斯くの如く朦朧たるものであるが、多數の社會主義者は、試驗的な且つ時としては逡巡的な方法を是としてゐる。革命的な遣り方はより少く支配的であり、臨機應變主義がよく廣く是認されてゐる。現在社會の變動は總て、例へば勞働者保險や勞働立法、範圍は狹からうとも國家的所有や監督の制度のやうに、その一般的傾向が集産主義的理想と一致してゐる限りは、歡迎されてゐる。また勞働者達の間の産業組合やトレード・ユニオンも、たとへその運動の範圍は全く私有制度の內にあるにしても、同じやうに歡迎されてゐる。蓋しそれ等は、その成員達を敎育し且つ彼等を共同動作の習慣において訓練するための手段だからである。

あらゆる種類の見解を有する人々が、近い將來において必要な改造について一緒に働き得るといふことは幸ひである。窮極の結果はその成行に委しておいて差支ない。吾々が現に爲し得

るところは僅かではあるが、それは、窮極の結果を形成するために多大の効果がある。社會主義に關する議論は決して無益ではない。それは人々の注意をば、社會の根本的諸問題の上に、現存諸制度の根據の上に、將來の發達がそれから進まねばならぬところの本源の上に、集中する。それは、或る最も高尚な人々にとつて魅力があつたところの目標を指示する。それは、かゝる目標には惹つけられない人々、或は、それは全く實現不可能だと思ふ人々、にとつてさへも、注目に値する。しかし其れは、大しては、人々の現在の努力および向上心に影響はない。かゝる努力および向上心に關しては、見解の一致の著しいものがある。社會が今後一二代に亘つて採るべき進路は不分明ではない、そして人々は總て、社會的不可知論者も社會主義者も、社會をば、殆ど總ての者によつて進歩の方向だと認められた方向に向けるために、協力して努力し得るのである。

第七篇の參考書類

W. Z. Ripley の Railroads : Rates and Regulation (1912) および Railroads : Finance and Organization (1915) は、アメリカの狀態について豐富な消息を載せてゐる。W. M. Acworth, The Elements of Railway Economics (1905) と E. R. Johnson, American Railway Transportation (new ed., 1910) との後者は主として記述的であつて本來アメリカの專門學校向きの教科書として書かれたものである。一九二一年現在のアメリカの狀態については、I. L. Sharfman, The American Railroad Problem (1921) 參照。外國書の中では、C. Colson, Transports et Tarifs (1908) は、專門的であり且つ詳細なものであるが、立派なものである。

合同およびトラストについては、A. Marshall, Industry and Trade, Book III (1919) は、英吉利、合衆國、および獨逸における發展の經過を見事に分析してゐる。R. Liefmann, Kartelle und Trusts (1909) は、當時の獨逸の狀態を簡潔に說明してゐる。また H. W. Macrosty, The Trust Movement in British Industry (1907) は英吉利の狀態を詳細に研究してゐる。特に合衆國の狀態を取扱つた書物は、R. T. Ely, Monopolies and Trusts (1900)、J. W. Jenks, The Trust Problem (1900)、E. S. Meade, Trust Finance (1903)、L. H. Haney, Business Organization and Combination (1914)、E. D. Durand, The Trust Problem (1915) である。

公有制度については、L. Darwin, Municipal Trade (1903) は、反對者によつての、鋭い批判的著書である。同じ議論は同著者の Municipal Ownership (1907) においてより簡單に述べられてゐる。S. O. Dunn, Government Ownership of Railways (1913) は、有力な反對論を述べてゐる。便利な要論は、the Royal Economic Society によつて發行された(一九一二年)論文集、The State in Relation to Railways に在る。公有と私有との兩方に關しての豐富な報告と議論とは、the National Civic Federation によつて發行された Report on the Municipal and Private Operation of Public Utilities (3vols., 1907) に在る。『公益業』に對する地方政治團體の關係については、D. F. Wilcox, Municipal Franchises (2vols., 1910—1911) に詳細な論究がある。

社會主義に關する著書は、多くは、問題の核心に觸れない議論を取扱つてゐる。このことは、余にとつては、社會主義的著書のうちで最も有名な且つ勢力ある Karl Marx, Das Kapital (English translation. 1891) についても謂へ

と思はれる。マルクス派の學說に關して議論および反駁を試みた無數の著書のうちでは、E. Böhm-Bawerk, Marx and the Close of his System (English translation, 1891) と J. E. Le Rossignol, Orthodox Socialism : a Criticism (1907) を擧げることができる。K. Kautsky, The Class Struggle and the Social Revolution (English translation, 1910) には、主としてマルクスに基いた簡潔にして力ある論究がある。J. Spargo. Socialism (1906) もマルクス派の教義と提案とを平易に說述してゐる。G. D. H. Cole, Guild Socialism Re-stated (1920) は、その提案に關する議論を摘要してゐる。S. and B. Webb, A Constitution for the Socialist Commonwealth of Great Britain (1920) は、社會主義的プログラムが必要ならしめる政治組織の諸問題を論じてゐる。

說明的な且つ批判的な著書のうちでは、A. Schaeffle の The Impossibility of Social Democracy および The Quintessence of Socialism (英譯、一八九二年および一九〇二年)は、殊に後に擧げたものは、立派なものである。O. D. Skelton, Socialism, a critical Analysis (1911) 參照。歎賞すべき歷史的にして批判的な著書(表題の示すやうに社會主義のより廣い關係に關するもの)は、W. Sombart, Sozialismus und Soziale Bewegung im 19 Jahrhundert (English translation. 1909) である。H. Herkner, Die Arbeiterfrage (7th ed., 1621) においては、第十九世紀を通じての社會主義に關する文獻、および、獨逸における社會民主黨が簡潔に議論されてゐる。社會主義に關する最も刺戟的にして辨別的な辯護および議論が、往々にしては、自から『科學的』だとは稱へない著述家達によつてものされてゐる。H. G. Wells の A Modern Utopia (1905) および New Worlds for Old (1908) や、G. Lowes Dickinson の Justice and Liberty はそれである。

大正十四年十月十日印刷
大正十四年十月十五日發行

ダウシング經濟學原理(7)
經濟組織の諸問題
正價金貳圓

禁漢譯
不許複製

譯者　長谷部文雄
發行兼印刷者　八坂淺次郎　京都市丸太町寺町東入
印刷所　弘文堂印刷部　京都市夷川通川端東入

發行所　京都市丸太町寺町東　振替口座大阪一七〇五番　電話上二〇〇九番　弘文堂書房

製本所　弘文堂工場

タウシッグ著　長谷部文雄譯

理原學濟經

第一篇	生産組織 正價貳圓 送料拾八錢	既刊
第二篇	價値と交換 正價貳圓 送料拾八錢	同
第三篇	貨幣と交換の機構 正價參圓 送料廿七錢	同
第四篇	國際貿易 正價壹圓七拾錢 送料拾八錢	同
第五篇	富の分配 正價參圓七拾錢 送料廿七錢	同
第六篇	勞働問題 正價貳圓 送料拾八錢	同
第七篇	經濟組織 正價貳圓 送料拾八錢	同
第八篇	租稅 附索引	續刊

京都　弘文堂發行

512
197

終